

令和元年度
長崎平和祈念式典市民派遣事業
報 告 書



川 越 市

事業の概要

- 1 目的 被爆地長崎を訪問し、長崎平和祈念式典への参列、原爆資料館や平和祈念像等を見学することを通じて、平和の尊さを学び、平和への思いを新たにする。
- 2 日程 8月8日（木）
午後2時～午後4時 ～原爆落下中心碑～原爆資料館～
8月9日（金）
午前10時30分～午前11時45分 平和祈念式典
- 3 参加者 市民 5名
事務局 2名



参加者感想文



「被爆者の言葉」

女子生徒（中学 1 年生）

8月8日、9日に長崎平和祈念式典市民派遣事業に参加しました。私がこの式典に参加したのは、親の勧めがあったからです。私も、なかなか出来ない貴重な体験になるのではないかと考えました。

一日目、原爆資料館に行きました。特に印象に残った写真が二枚ありました。一枚は、全身黒焦げに焼けた少年の遺体の写真です。爆心地付近にいたそうです。そして二枚目は、顔中が焼けただれケロイドが広がっている人の写真です。人間は、たった一発の爆弾によって一瞬にしてこれほどにも変えられてしまうのかと恐ろしくなりました。原子爆弾の投下の話は、これまで私にとって遠い存在のものでしたが、本当に、現実起きたことだったのだな、と感じました。

二日目、8月9日。朝から式典に参列するために平和公園に行きました。式典のはじめに被爆者のみで結成されたコーラス隊「ひまわり」の合唱がありました。今回の合唱では長崎のボランティアのメンバーも一緒に歌っていましたが、その人たちを除くともう全員高齢者でした。立ったままでは歌えず座って歌う方や、腰が曲がっている方もいました。それでも歌い続ける姿に、思いの強さを感じました。今年、被爆者の平均年齢は82歳を超えたそうです。被爆者の高齢化の事実を目の当たりにしました。

式典で最も印象に残ったのは、被爆者代表山脇さんの平和への誓いです。山脇さんは11歳のときに爆心地から約2キロメートルの自宅で被爆したそうです。話の中で、このような一節がありました。

「兄弟三人で爆死した父を荼毘に付しましたが、焼けていく遺体を見るに耐え切れずその場を離れました。翌日遺骨を拾いに行くと、手足の一部しか完全に燃えてはおらず、残りは半焼け状態でした。『せめて頭の骨だけでも拾って帰ろう』と、兄が火箸で頭の部分に触れたら、頭蓋骨は石膏細工を崩すように割れ、白濁した半焼けの脳が流れ出したのです。悲鳴をあげ逃げ出し、私たちは父の遺体を見捨ててしまいました。」

ここまで残酷な話を直接聞いたのは初めてで、驚くと共に、これは本当に74年前の現実なのだと知ることができました。もしこれが自分だったら…と置き換えて想像すると、これ以上恐ろしくて悲しいことがこの世に存在するのだろうかと思いました。山脇さんはきっと、忘れてしまいた

いほどの記憶を話してくださったのではないのでしょうか。

私たちは、最前列の席を用意していただき特別来賓の方々がよく見える位置にいました。私は、式典に参列するまで会場は重々しい雰囲気になるのかと思っていました。しかし実際には、暑さを気にして式典に集中できていない人もいました。また、来賓の中にはあくびをしている人もいました。内閣総理大臣の挨拶も8月6日にテレビで見た広島の式典での内容とほぼ同じでした。なんだか、とても残念でした。

長崎市長は平和宣言の中で「平和のためにできることはたくさんあります。あきらめずに、そして無関心にならずに、地道に『平和の文化』を育て続けましょう。」と仰っていました。

私は、自分が戦争や核兵器について関心をもち続けることはできるけれど、無関心な人にまで想いを伝えるのは、とても難しいとあきらめていました。しかし、あきらめずに、せめて自分が長崎に行ったことや見聞きしたことを、まずは親しい友達に話してみたいと思います。

この二日間の体験は、決して楽しいと言えることばかりではありませんでしたが、それでも経験できて良かったです。

長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典を終えて

女子生徒（中学２年生）

私は、先日長崎へ行ってきました。74年前の8月9日、長崎で何が起こったのか学んできました。原爆資料館に行ってみると、原爆の熱線により溶けて変形したビン、爆風でガラスの破片が突き刺さっている服、どれも悲惨な姿でした。1つの爆弾で7万人以上もの人が亡くなってしまい、また生き残った人たちも原爆による病気でたくさんの方が亡くなりました。原爆投下から74年後の今もお原爆の放射能による後遺症で、苦しむ人たちがいます。そのような中、懸命に生きている被爆者たちは「同じ苦しみの世界の誰にも味わわせてはならない。」と原爆被害の残虐な真相を国の内外に伝え、広げ、核兵器の速やかな廃絶を世界に訴え続けています。

原爆資料館で一番胸を打たれたのは「焼き場に立つ少年」という題名の写真です。10歳ぐらいの少年が自分の弟を背負い、焼き場に立っている光景です。この写真を撮影した人によると、少年には重大な目的を持ってこの焼き場にやってきたという強い覚悟を感じられたそうです。そして、焼き場のふちに来ると、硬い表情で目を凝らして立ち尽くし、死体を焼いていた男達が次に少年の弟を抱えて、焼き場の熱い灰の上に横たえたそうです。そして、炎を食い入るようにみつめる少年の唇に血がにじんでいたそうです。炎が静まると、沈黙のまま焼き場を去って行ったそうです。この少年や弟の気持ちを思うと、私はかわいそうでかわいそうでなりませんでした。

また、私は8月9日に長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に出席しました。被爆者代表の山脇佳朗さんは「平和への誓い」の時、こうおっしゃいました。「60歳を過ぎて英語を独学で学び、2015年11月長崎で開催されたパグウォッシュ会議では英語で、世界の科学者に核兵器廃絶に力を貸して下さいと訴えましたが、ロシア、アメリカなどの国々には今なお13,880発もの核兵器が保有されているといわれています。」この時、私は耳を疑いました。せいぜい100くらいだと思っていたので、1万以上あることにとても驚きました。そして、山脇さんや他の被爆者の方と同じように、世界で唯一の被爆国として世界中の核保有国に「核兵器を無くそう」と直接会って訴えたいです。そして、核兵器廃絶を実行してほしいです。原爆がどれほど恐ろしいものなのか、人と人との絆をどれだけ壊し、体と

心をどれだけ傷つけるものなのか、たくさんの人に理解してほしいと思いました。

最後に、原爆は全く無差別に、短時間に、7万人以上もの人々の命を奪い、傷つけました。そして、生き延びた被爆者を死ぬまで苦しめ続けます。人間にとって絶対に許されるべき行為ではありません。一度に全てを奪い取る原爆そして核兵器はこの世界には必要のない、必要とされていないはずのものです。

どうか、核保有国は一刻も早く「核兵器廃絶」を実行してください。74年前、あの夏に長崎でおきた出来事が二度と繰り返されないように。

願い

女子生徒（中学2年生）

私の祖母は、長崎県の島原半島で生まれ育ちました。八人兄妹の末っ子で、一番上のお姉さんを原爆によって亡くし、その後、二番目のお姉さんを被爆による白血病で失っています。私は幼い頃、祖母からこの話を聞いて非常に衝撃を受けました。

今回私は、長崎平和祈念式典への市民派遣事業があることを知り、祖母の生まれ育った土地や原爆の真実を知りたいと思い応募しました。

初日、私たちはガイドの方の説明を聞きながら平和公園を見学しました。原爆投下の中心地にある遺跡、割れた瓦やお茶碗が生々しく残る当時の地層、爆心地から一番近くにある防空壕。原爆のすさまじさは74年の時を経ても変わらずに今を生きる私たちに訴えかけてきます。中でも心に残ったのは、防空壕の中で1人生き残った少女の話です。突然投下された原爆により彼女は一瞬にして全てを失いました。訳も分からず目を開けると、母親は見当たらず、周りには知らない大人達の遺体が転がり、聞こえるのは辛うじて生きている人の助けを求める声。そして、足元には数分前まで一緒に遊んでいた妹たちの遺体。彼女が原爆によって失ったものはあまりにも大きすぎました。

私はこの話を聞いてとてもショックを受けました。彼女は何もしていないのに。たとえ無傷であったとしても、原爆による多量の放射能が彼女を襲い、またその時見た地獄のような光景が一生彼女を苦しめ続けたのではないかと思うと、私は胸が苦しくなりました。

原爆資料館も見学しました。資料館を出てすぐの場所にある「焼き場に立つ少年」の写真は、原爆が人に与えた感情を全て写し出しているように思いました。口を固く結び、死んだ弟を背負って背筋を伸ばして立つ少年。原爆は誰も幸せにしない、私はそう強く思いました。

翌日の長崎平和祈念式典では、実際に被爆された方の歌と話、長崎市長による長崎平和宣言を聴きました。どれも戦争によって、原爆によって、長崎にもたらされた大きな被害を訴えるものでした。

「長崎を最後の被爆地に」被爆者の方のこの言葉にどれほどの願いが込められているのでしょうか。二度と同じ過ちを起こしてはいけません。核爆弾を廃止して欲しい。ですが日本はいまだに核兵器禁止条約に署名をしてい

ません。日本こそ、唯一の被爆国として、世界を非核化に導かなければならないのに。

私は今回の経験を通して、原爆の残酷さを初めて知りました。長崎に実際に足を運び、自分の目で原爆と向き合わなければ知り得なかった事実。戦後74年、これからも刻々と日は過ぎていきます。しかし私たちは、この悲劇に決して目を背けることなく、被爆した方々の願いを世界に発信していかななくてはならないと思います。

肌で感じた長崎のエネルギー

女子生徒（中学３年生）

７４年前。はるか昔のように感じる年月であり、私たち中高生にとっては広島・長崎の原爆投下という出来事が教科書に載る歴史の一部としか感じていなかったように思う。

しかし実際に長崎を訪れた私は、二日間にして１９４５年８月９日が単なる歴史上の出来事ではなくなった。

長崎の土地に足を踏み入れたその日、私たちはすぐに長崎原爆資料館を訪れた。３年半前、母と広島を訪れたことのある私は、長崎の資料館も広島と同様なんだろうと、何となく想像していた。原爆の恐怖を模型などで感じられるような、かなり恐ろしい展示が広がっているのだろうと。そんな予想は展示が始まった瞬間にあっけなく裏切られた。ガイドさんと共に回った原爆資料館では、この場所に確かに原爆が落ち、ここにあった生活、人々の命、それまであった長崎市民の当たり前が壊れたのだと実感できるものだった。そこにあったのは、原爆が落とされた１１：０２でぴたりと止まっている振り子時計や植物の跡がくっきりと写された家の壁、黒焦げになった人びとの写真。それらに加え、ガイドが次々と語るあの日のエピソードを聞きながら私は、その場所で日常生活を送っていた長崎市民に思いを寄せてみた。一瞬で黒焦げになってしまった性別も年齢も国籍もわからない人々、中には赤ちゃんを抱え熱線から守ろうとしたお母さんもいた。そうして私は原爆という兵器の底知れない惨さに怒りと悲しみを抑えきれず、また犠牲者にはどうしようもないくらい切なさを覚えた。

現在の核保有国のトップたちはこの兵器が及ぼした惨さを知っているのだろうか。一瞬で黒焦げになってしまった人々が私たちの暮らしと何ら変わらない暮らしをおくり、決してこんな一瞬で亡くなっていいような命ではないことを。７４年たった今も激しい痛みや後遺症に悩まされている被爆者が必死の思いで核のない世界を作ろうとしているかを。一日目、私は悲しみと怒りでいっぱいだった。

８月９日、被爆者にとって最も暗い日の７４回目だ。この日出席した長崎平和祈念式典、私が一番感じたのは、人びとの未来への希望だった。もちろん会場には被災して亡くなられた方々への悲しみや、核保有国を含めいまだ非核化に関する様々な条約に署名していない政府への怒りもあっ

た。しかしそれよりも私は市民のこれからの未来に対する希望を強く感じた。長崎を最後の被爆地にしたいという想いの元、平和を強く願い歌う姿や、今秋のローマ法王の訪問を期待する姿からだ。会場についてすぐに聞いた被爆者のみで結成されたひまわり合唱団の歌や、被爆者代表による平和への誓いは、このような未来へのエネルギーで満ち溢れていた。実際に自分自身の目や耳で見て感じなければわからなかったと思う。74年という年月が経った今、被爆者も数少なくなり悲しみに暮れるだけでなく、被爆地だからこそその非核化に向けての強いエネルギーがそこにはあった。

私にとって8月9日の長崎の被爆は、ただの悲しい惨い歴史ではなくなり、未来へのエネルギーを肌で感じ私たち一人ひとりが、長崎の人々の思いをこれからも広く伝えていかなければいけないことなのだ。そう、戦争を経験していない中高生から、私から、長崎を最後の被爆地にするために。

7 4年前の長崎を見つめて

女子生徒（高校2年生）

私は今までテレビや書籍の情報を見聞きして、戦争や原爆のことを知った気分になっていたのかもしれませんが。この長崎平和祈念式典への市民派遣事業を通じてその様に感じました。2日間の滞在中には、目を背けたくない写真や遺物、聞いていて耳を塞ぎたくないような証言がありました。戦争の真の恐ろしさを目の当たりにしたのだと思いました。しかし、この辛い現実から逃げてはいけないと思い、一つひとつの物事を真剣に向き合いました。その中でも特に印象に残った三つのことを紹介します。

一つ目は、長崎原爆資料館に展示されている「焼き場に立つ少年」の写真です。その写真には、亡くなった弟を背負い、火葬場に立ち尽くす少年が映っていて、原爆投下直後とは思えない真っ直ぐな眼差しと、食いしぱるあまりに血が滲んだ唇を浮かべています。この少年はどんな気持ちで立っていたのでしょうか。また、瞳の先にはどのような惨い光景が広がっていたのでしょうか。原爆は人々の大切な家族を一瞬で奪いました。家族を失ったとしたら、私は平常心を保てるとは到底思えません。原爆の残酷さを胸に深く刻みつける一枚の写真でした。

二つ目は、長崎市長の田上富久さんの長崎平和宣言です。その一文を紹介します。

『原爆は「人の手」によって作られ、「人の上」に落とされました。だからこそ「人の意志」によってなくすことができます。そして、その意志が生まれる場所は、間違いなく、私たち1人ひとりの心の中です。』

平和祈念式典でこの言葉を聞いた時、私は思わず「その通りだ」と声を上げたくなりました。人の手によって作られた原爆という名の悲劇は広島・長崎にもたらされました。それからは、人の手により原爆を撤廃しようとする動きが広まりつつあります。しかし、自らの国の軍事力・権威を示す為に核兵器を持つという流れが広まりつつあることもまた事実です。今、その様な核兵器を持つことが当然となる流れがある中で行うべきことは、私たちの意識改革です。田上市長のお言葉にもあったように「人の意志」による核兵器廃絶は実現可能な未来です。

高校生の私に出来ることはほんの僅かで小さなことかもしれませんが式典で聞いた言葉、資料館で見た写真のこと、友人に話すだけで友人の原

爆に対するイメージがより鮮明になると私は考えます。そして今の日本がどんなに幸せで平和なものなのか私と同じ様に感じることでしょう。

三つ目は、山脇佳朗さんによる被爆者代表の平和への誓いです。山脇さんが父親の遺体を火葬する話はとても生々しく痛々しい話でした。火葬後火箸で頭蓋骨を触れた際に出てきた半焼けの脳を見た時、恐怖のあまり逃げてしまい、父親の遺体を置き去りにしたという後悔は今も消えないと語りました。ショッキングな話に私は胸がつまる思いでした。変わり果てた父親の姿を見た時どのような気持ちだったのでしょうか。つらく、苦しく、言葉では伝えきれないような気持ちに違いありません。生き残った人々は同じ様な無残な体験をしなければならず、また熱線による傷や放射能の後遺症に悩みながら生きることを強いられました。原爆は人々に多くの悲しみ、一生消えない傷を残しました。85歳の山脇さんは病身を押して毅然と語っていました。広島と長崎で原爆の犠牲となった何十万もの魂が山脇さんの背中を押していたのだと思います。

最後にこのような貴重な機会を与えてくださった川越市と、喜んで事業に参加することを応援してくれた両親に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

私は、長崎に原爆が投下された「11時2分」さえ知らない無知な者でしたがこの事業に参加することで原爆について深く学ぶことが出来ました。一泊二日の長崎での思い出はこれからも私にとってかけがえのないものになるでしょう。





小江戸かわごえ平和都市宣言・2005

〔平成17年8月15日
告示第337号〕

「小江戸かわごえ」とも呼ばれる本市は、蔵造りの町並みをはじめとする多くの歴史的遺産をもっています。数多くの観光客も訪れ、中核市として発展を遂げつつあるのも、戦禍を被ったものの大きな空襲には見舞われず、今日まで経過したからにほかなりません。

川越市では平和基金を設置し、広島で行われる平和記念式典に市民代表を派遣する等の事業を実施してきました。終戦及び被爆60周年に当たる今年、非核三原則の堅持とあらゆる核兵器の廃絶を求め、ここに平和で安全・安心な都市であることを宣言します。

長崎平和宣言

目を閉じて聴いてください。

幾千の人の手足がふきとび
腸わたが流れ出て
人の体にうじ虫がわいた
息ある者は肉親をさがしもとめて
死がいを見つけそして焼いた
人間を焼く煙が立ちのぼり
罪なき人の血が流れて浦上川を赤くそめた
ケロイドだけを残してやっと戦争が終わった
だけど……
父も母ももういない
兄も妹ももどってはこない
人は忘れやすく弱いものだから
あやまちをくり返す
だけど……
このことだけは忘れてはならない
このことだけはくり返してはならない
どんなことがあっても……

これは、1945年8月9日午前11時2分、17歳の時に原子爆弾により家族を失い、自らも大けがを負った女性がつづった詩です。自分だけではなく、世界の誰にも、二度とこの経験をさせてはならない、という強い思いが、そこにはあります。

原爆は「人の手」によってつくられ、「人の上」に落とされました。だからこそ「人の意志」によって、無くすことができます。そして、その意志が生まれる場所は、間違いなく、私たち一人ひとりの心の中です。

今、核兵器を巡る世界情勢はとても危険な状況です。核兵器は役に立つと平然と公言する風潮が再びはびこり始め、アメリカは小型でより使いやすい核兵器の開発を打ち出しました。ロシアは、新型核兵器の開発と配備を表明しました。そのうえ、冷戦時代の軍拡競争を終わらせた中

距離核戦力（I N F）全廃条約は否定され、戦略核兵器を削減する条約（新S T A R T）の継続も危機に瀕しています。世界から核兵器をなくそうと積み重ねてきた人類の努力の成果が次々と壊され、核兵器が使われる危険性が高まっています。

核兵器がもたらす生き地獄を「くり返してはならない」という被爆者の必死の思いが世界に届くことはないのでしょうか。

そうではありません。国連にも、多くの国の政府や自治体にも、何よりも被爆者をはじめとする市民社会にも、同じ思いを持ち、声を上げている人たちは大勢います。

そして、小さな声の集まりである市民社会の力は、これまでも、世界を動かしてきました。1954年のビキニ環礁での水爆実験を機に世界中に広がった反核運動は、やがて核実験の禁止条約を生み出しました。一昨年の核兵器禁止条約の成立にも市民社会の力が大きな役割を果たしました。私たち一人ひとりの力は、微力ではあっても、決して無力ではないのです。

世界の市民社会の皆さんに呼びかけます。

戦争体験や被爆体験を語り継ぎましょう。戦争が何をもたらしたのかを知ることは、平和をつくる大切な第一歩です。

国を超えて人と人との間に信頼関係をつくり続けましょう。小さな信頼を積み重ねることは、国同士の不信感による戦争を防ぐ力にもなります。

人の痛みがわかることの大切さを子どもたちに伝え続けましょう。それは子どもたちの心に平和の種を植えることになります。

平和のためにできることはたくさんあります。あきらめずに、そして無関心にならずに、地道に「平和の文化」を育て続けましょう。そして、核兵器はいらない、と声を上げましょう。それは、小さな私たち一人ひとりにできる大きな役割だと思います。

すべての国のリーダーの皆さん。被爆地を訪れ、原子雲の下で何が起こったのかを見て、聴いて、感じてください。そして、核兵器がいかに非人道的な兵器なのか、心に焼き付けてください。

核保有国のリーダーの皆さん。核不拡散条約（N P T）は、来年、成立からちょうど50年を迎えます。核兵器をなくすことを約束し、その義務を負ったこの条約の意味を、すべての核保有国はもう一度思い出すべきです。特にアメリカとロシアには、核超大国の責任として、核兵器を大幅に削減する具体的道筋を、世界に示すことを求めます。

日本政府に訴えます。日本は今、核兵器禁止条約に背を向けています。唯一の戦争被爆国の責任として、一刻も早く核兵器禁止条約に署名、批准してください。そのためにも朝鮮半島非核化の動きを捉え、「核の傘」ではなく、「非核の傘」となる北東アジア非核兵器地帯の検討を始めてください。そして何よりも「戦争をしない」という決意を込めた日本国憲法の平和の理念の堅持と、それを世界に広げるリーダーシップを発揮することを求めます。

被爆者の平均年齢は既に82歳を超えています。日本政府には、高齢化する被爆者のさらなる援護の充実と、今も被爆者と認定されていない被爆体験者の救済を求めます。

長崎は、核の被害を体験したまちとして、原発事故から8年が経過した今も放射能汚染の影響で苦しんでいる福島の皆さんを変わらず応援していきます。

原子爆弾で亡くなられた方々に心から哀悼の意を捧げ、長崎は広島とともに、そして平和を築く力になりたいと思うすべての人たちと力を合わせて、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に力を尽くし続けることをここに宣言します。

2019年（令和元年）8月9日

長崎市長 田 上 富 久





川越市マスコットキャラクター
ときも

令和元年度 長崎平和祈念式典市民派遣事業
報 告 書

令和元年 9 月
川越市 総務部 総務課 総務担当
〒350-8601 川越市元町 1-3-1
TEL049-224-5550(直通)